

## あそびを学ぶ・あそびで学ぶⅡ：「雪あそびキャンプ」への取り組みから

遠 藤 知 里

### はじめに

本研究は、本学保育科の授業や正課外活動等の実践研究を通して、保育者をめざす学生の学び方の特徴を理解し、保育者養成短大において「自ら学ぶ」保育者を育てるために必要な体験内容を捉えることを目的とする。なお、本研究は正課教育の中での実践を対象とした遠藤（2013）の後編であり、正課外活動としての実践を取り上げて考察していく。

時代を問わず、教員の資質向上は常に求められてきた。しかし、この十数年の間に、子どもを取り巻く環境の変化を受けて、また幼児教育の重要性についての社会的認識の深まりにも連動して、幼稚園教諭や保育士の資質向上が強く求められるようになった。例えば、文部科学省（2002）による「幼稚園教員の資質向上について―自ら学ぶ幼稚園教員のために（報告）」は、その後の養成課程のカリキュラム改正や現職研修のあり方を方向付けた報告である。この報告は、その序文によれば「日々幼児と生活をともにし、発見や喜びを分かち合い、成長を見守り、必要なときに援助をさしのべる、幼稚園教員やその志望者が、養成から現職段階を通じて、自ら資質向上に取り組んでいくためには、どのような課題があるか、今後の展望と方策は何か、についてとりまとめ」た（無藤,2002）ものであり、具体的には養成・採用・現職の各段階に求められることを提案する内容となっている。

このうち本研究に関連するのは、養成段階への提案である。要約すると、養成段階の基本的視点は、「幼児理解に基づき、遊びを通じて総合的に指導するという幼稚園教員の基盤的な専門性を養成すること」であり、養成段階における課題は、①教員志望者自身の多様な体験の確保や得意分野の素地の形成、②実践力の育成、③教員養成のための教育環境の充実、④上級免許状の取得や免許状及び資格の併有、⑤幅広い幼稚園教員志望者の確保、の5点にまとめられている。

この報告書が提示されてから十数年が経過した現在、各養成校における授業実践の質や、正課外活動に関する学生支援のあり方が問われているのではない。

まずは、自分自身に対してそれを問いたい。筆者の専門領域からは、「幼児理解に基づき、遊びを通じて総合的に指導する」という基盤的な専門性の基礎を作ること、「多様な体験の確保や得意分野の素地の形成」に資する内容を提供することが可能である。しかし、筆者の実践を省みると、内容が「伝わったかどうか」の確認に留まっていた。つまり、学生が「どのように学んだか」についての配慮に欠け、またそれを可能とするには学生に対する自らの関与が不足していた。そこで改めて問題とする必要を感じ、本研究を構想した。

なお、本研究では正課外活動での実践を対象とする。前編である遠藤（2013）では、90分×15回の標準的な授業の中でできることに注目した。授業では、共通の内容を全ての学生に届けることができるという利点があるが、時間と場所の制約がある。一方、正課外活動は時間と場所の制約がなく、多様な活動を行うことができる。そのため、学外で行う自然体

験活動や、学生が計画して行うプロジェクト活動等の実施に向いている。さらに、時間的・空間的な連続性や人の行き来のある環境、具体的には今日から明日への時間的つながり、さらに「私たち」以外の他者との社会的つながりがある中で行う活動は、学生自身が体験の連続性についての気づきを得やすいものと思われる。そして筆者自身にとっても、「学生と生活をともにし、発見や喜びを分かち合い、成長を見守り、必要なときに援助をさしのべる」という、授業内で達成できずにいた課題と集中的に向き合うことで、自己を確認する機会であるとも考えた。

以上の問題意識に基づき、ここでは平成 24 年 3 月に保育科学生の正課外活動（自主ゼミ）として実施した 3 泊 4 日の雪上活動における学生の体験内容を検討し、直接体験の中で学生が「自ら学ぶ」とはどういうことか、そのすじみちを考察していきたい。

## 方 法

### 1. 自主ゼミ「雪あそびキャンプ」について

#### 1.1. 自主ゼミ実施に至った経緯

保育科では、平成 22 年度まで「保育ゼミナール」という授業が開講されていた。これは、各教員の専門性を活かしたテーマで行われる演習であり、筆者も平成 21 年度と 22 年度に「子どもと自然」をテーマとしたゼミを担当した。筆者のゼミでは、10 名程度の学生と週 1 回の活動を共にし、子どもを対象とした自然体験活動の指導法を学びあってきた。また、学生の指導実践の場として公開講座のキャンプ（日帰り、1 泊 2 日、2 泊 3 日）を静岡市内で、さらに学生が計画実践する自主活動の場として 2 泊 3 日の雪上活動を長野県・柵池高原で実施してきた。しかし、保育士養成課程の授業構成の変更等に伴い時間確保が困難となったことから、平成 23 年度以降「保育ゼミナール」は開講されず、現在に至っている。

ところが、先輩の話を聞いて雪上活動に関心を持った学生 U 子が、「自分もやってみたかった。」と申し出てきた。話を聞いて、筆者も学生の思いを大切にしたいと考え、「本当にやりたかったら、同じ思いのある学生を 10 人程度集めてもう一度来てほしい。」と伝えたところ、U 子は他の学生に声を掛けて同じ思いの仲間を 10 名募り、実現へと結びつけた。

#### 1.2. 教員としての思い

幼児教育は、生活の中で、遊びを中心として、環境を通して行われる。環境との相互作用の中で身体感覚を伴う多様な活動を経験することにより自己が充実し、安心感のある人間関係の中で各々の自己が十分に発揮されることが大切である。野外での活動には、これと似た構造がある。したがって、野外教育プログラムは、保育者をめざす学生が環境を通してということの意味を理解する機会となり得るという思いがあった。

そこで、学生たちが雪という自然に触れて十分に遊ぶこと、積雪地での心理的・体力的負荷の高い冒険プログラムを体験する一方で仲間と共にする生活の中で安心感を得ること、学生自身がやりたいことを計画する部分を含めること、身体運動を中心とした活動の中で充実感を感じることを重視して、プログラムを構想した。

#### 1.3. 実践経過

平成 24 年 3 月下旬に長野県・柵池高原で 3 泊 4 日のプログラムを実施した。学生自身が装備のパッキングやしおり作り等の準備を行うために、3 月上旬にミーティングを行った。

筆者はプログラム立案・指導に当たったが、梶池自然園でのスノーシューハイキングでは現地在住のガイド1名に同行を依頼した。また、スノーボードは自主活動として学生が企画し、現地スキー学校の指導者2名が指導した。

なお、プログラム期間中の生活時間の構造について、山田(2009)による保育における生活時間の分類を参考にして、スノーシューハイキング、スノーボード、ナイトハイク、スライドショーを「(指導者の)意図的活動時間」として、また、雪あそびを「自発活動時間」として捉え、それ以外を「生活展開時間」とした。表1に、プログラムの概要を示した。

表1 プログラムの概要

初日	2日目	3日目	4日目
集合・出発 (移動)	起床・朝食	起床・朝食	起床・朝食
昼食 現地着	スノーシュー ハイキング 昼食	スノーボード 昼食	個人別自由活動 (温泉・散策等)
雪あそび (自発活動時間)	(意図的活動時間)	(意図的活動時間)	昼食 現地発 (移動)
夕食	夕食	夕食	解散
スノーシュー ハイキング 準備	ナイトハイク (意図的活動時間)	スライドショー (意図的活動時間)	
ふりかえり 就寝	ふりかえり 就寝	ふりかえり 就寝	

## 2. 研究方法

### 2.1. 参加者（研究協力者）

本学保育科1年生で、自主的にこのプログラムに参加した女子学生11名が本研究に協力した。なお、筆者は全ての研究協力者に対して授業担当教員として関わってきた経緯がある。今回は自主ゼミの指導担当教員として全面的に関与し、野外教育プログラムの指導およびマネジメント等を行った。研究協力者には研究についての説明を事前に行い、質問紙調査への協力と日誌の記入に対する同意を得た。最終的には、11名のうち8名が完全な資料を提出した。ここでは、そのうち2名の資料を用いて事例的検討を行う。

### 2.2. 調査内容と手続き

#### 1) 生活展開時間での気分（快 - 不快）

適応の指標として、生活展開時間での「気分」に着目した。ここでは、身体起因性の気分を測定する調査用紙である二次元気分尺度（坂入ほか,2009a）を使用し、プログラム前後およびプログラム中に計10回の調査を実施した。結果は、二次元グラフ（坂入ほか,2009b）および活性度と安定度の数値の変化で把握した。項目とグラフの説明を図1に示した。

二次元気分尺度は、各項目の得点に基づいて算出した安定度と活性度の各得点を各軸にプ

ロットした後、そこから軸に対して垂直に引いた直線の交点がどのエリアにあるかによって、その時の気分を評価することができる。本研究で取り上げた「快 - 不快（快適度）」の軸に関しては、快の方向に「活動に適した」エリアと「休息に適した」エリアが、不快の方向「無気力・抑うつ」エリアと「緊張・不安」エリアがある。一方、「沈静 - 興奮（覚醒度）」に関しては、覚醒度低（沈静）の方向に「眠り」エリアが、覚醒度高（興奮）の方向に「興奮」エリアがある。なお、中央付近は「平常心」のエリアである。一方で、安定度、活性度の得点から「快適度」、「覚醒度」の得点を算出して利用することもできる。

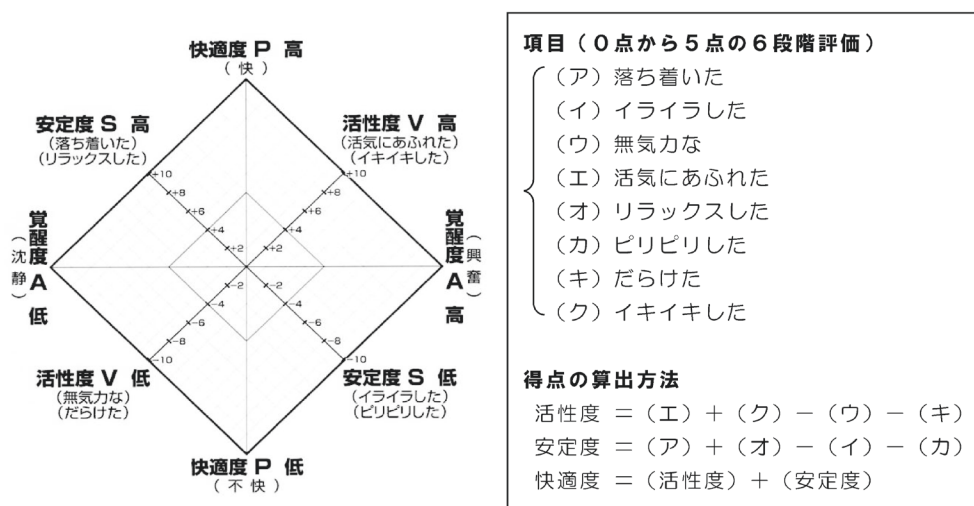


図1 二次元気分尺度の説明

## 2) 自発活動時間、意図的活動時間の体験内容

自発活動時間と意図的活動時間の体験内容を把握するために、体験内容の自由記述を求めた。毎晩活動を振り返るミーティングを行った後、個人の日誌として、参加者自身が活動の中での出来事や感じたこと、考えたこと等を記載した。

### 2.3. 結果の解釈方法

生活展開時間の気分の変化のうち、快適度にかかわる「安定度」と「活性度」の変化が特徴的であった2名を事例として、日誌に基づいて体験過程を記述した。

## 結果と考察

### 1. 参加者全体の傾向

#### 1.1. 二次元気分尺度の解釈

プログラム前後およびプログラム中に二次元気分尺度によって把握した各参加者の個別データについて、(1) 二次元グラフへの「気分」のプロット、(2) 「活性度」と「安定度」の変化のプロフィール作成、の2通りの方法で可視化し、検討を行った。

「気分」の二次元グラフ上のプロット位置の変化は、個人によって異なる様子を示したが、快のエリアにすべて含まれる（図1左図の上半分のエリアにプロットされる）配置となつて

いた。積雪地という不慣れな環境での活動であるにもかかわらず、生活展開時間には気心の知れた仲間と共に、ユースホステルという家庭的でくつろげる環境の中で、リラックスした快い気分で過ごすことができたものと思われる。

また、8名の「活性度」と「安定度」の平均値をとってその変化をみると、(1)安定度が正の値をとって持続すること、(2)活性度は朝が最も高く就寝前が最も低い得点を示すこと、の二つの特徴が見出された(図2)。

なお、後述の事例検討では、①8名の平均値の変化と似たプロフィールを示したA子(図3)、②活性度の変化が乏しく安定度が相対的に低かったB子(図4)、の2名について、体験内容のエピソードと共に考察していく。

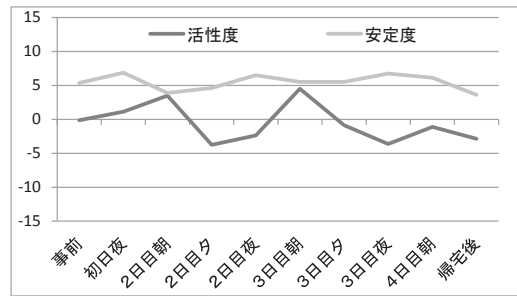


図2 参加者8名の活性度と安定度の平均値

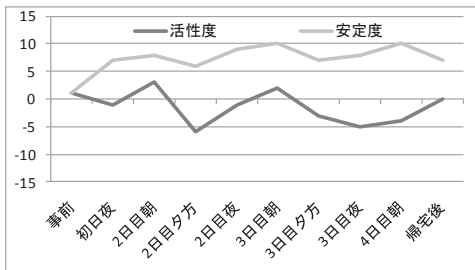


図3 A子の活性度と安定度の変化

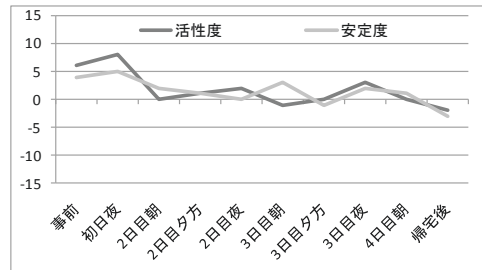


図4 B子の活性度と安定度の変化

## 1.2. 雪上プログラムでの体験内容

雪上プログラムでの体験内容については、ジャーナルの記述内容には自然環境と身体との相互作用が豊かに含まれ、体験の意味に対する省察が自然に生じる様子が見えられた。また、将来の職業に対する言及(保育者になった時〇〇〇〇…、保育者になるために〇〇〇〇…、など)も特徴的であった。

初日のジャーナルの内容を分析すると、スノーシューで歩くのが難しかったことやかまくら作りの達成感が共通して言及されていた。記述全体を集約し「雪に対する感動」、「遊びこみ」、「個々の自己発揮」、「仲間とのコミュニケーション」、「翌日以降への期待」という内容が見出された。

2日目のジャーナルの内容を分析すると、スノーシューハイキングでは雪山の風景に感動したことや思った以上に体力的に厳しかったことが、ナイトハイクでは昨日作ったかまくらに灯りを点したことや星の美しさが共通して言及されていた。記述全体を集約し「自然の厳しさ」、「達成感」、「体験の意味への気づき」という内容が見出された。

3日目のジャーナルの内容を分析すると、スノーボードで滑れるようになった喜び、身体で覚えていくことについての気づきが共通して言及されていた。また、全員が言及したとは言えないが、3日間の体験を保育に対する思いに関連付ける記述が複数みられた。記述全体

を集約し「新しい技術の体得」、「身体感覚への気づき」、「将来への思い」という内容が見出された。

## 2. 体験内容の事例的検討

### 2.1. A子のエピソード

初日のエピソードでは、雪遊びで時間を忘れて遊び込んだことが語られている。スノーシューに慣れることも兼ねて、雪が積もった森の中を散策しながら雪遊びを存分に楽しんだ。しばらく各々が思い思いに雪遊びを楽しんだ後、誰からともなく「かまくらを作りたい」という声が出た。全員で一心に雪を積み、かなり大きな雪山を作り上げた。その雪山に登って滑り降りるなど遊びながらの仕事をし、人が何人も入れるほどのかまくらが完成したのは周囲が薄暗くなった頃だった。その後、ユースホステルに戻り温かい夕食を頂いた。文字通り、日が暮れるまで遊んだ体験を、A子は以下のように振り返っている。

長野についてから雪の中で長い時間遊んでいて、こんなに長く外で遊びっぱなしなのは久しぶりだなと思いました。普段の生活の中で、時間があっても外で自然の中で遊んで過ごすということはしないので、めったにしない体験がこの4日間できそうだなと思いました。

かまくら作りは初めてで、作り方もよくわからなかったけれど、みんなで意見を出し合いながら本当に作れたときはビックリしました。かまくらに入ったときに、ほんのり温かくて、本当に温かいんだなあと感動しました。

私一人だけだったらあんなに大きなかまくらは作れなかったと思うので、みんなで来て作ることができてよかったなと思いました。

スノーシューをはいて雪の上を歩いたのも初めてだったので、はくのも苦労したけど、初めてのことがたくさん経験できそうなので、いろいろなことをたくさん経験して帰りたいです。

A子の文章から、「こんなに長く外で遊びっぱなしなのは久しぶり」、「普段の生活の中では時間があってもしない」と、今日から「めったにない体験」が始まり、これから続くということに期待を高めている様子が伝わってくる。また、かまくら作りも初めての経験であり、試行錯誤をしながら作り上げた。さらに「かまくらに入ったときに、ほんのり温かくて」と、「(雪は冷たいものであるが、)かまくら(の中)は温かい」という知識としてのみ知っていたことを実感として味わい、その驚きを素直に言葉にしている。全体として、この日は長時間の移動に始まり、さらには不慣れな雪の中での長時間の活動で心理的・身体的負荷が高かったはずであるが、「初めてのことがたくさん経験できそうなので、いろいろなことをたくさん経験して帰りたいです。」と期待の言葉で締めくくっている。

2日目には、スノーシューハイキングのことが語られている。スノーシューハイキングでは、柵池自然園周辺の雪原を散策したり、動感にあふれた雪遊びをしたりした。天候に恵まれ、白銀の山並みや稜線の雪煙などを間近に見上げながら、ハイキングが始まった。

今日は、スノーシューをはいてハイキングに行きました。

天気がよかったので、景色がとてもきれいでした。ゴンドラやロープウェーから眺めた時に見えた山々が本当にきれいでびっくりしました。

ガイドの人に案内してもらいながら雪の中を歩いているとき、最初は雪に足がとられてしまいうまく



歩けなかったけれど、次第に慣れてきて、斜面の中を速く歩けるようになったときにはとても嬉しかったです。ハイキング中に斜面をおしりですべって下りるのがたのしかったです。

お昼の時に雪を机にしてランチをしたのははじめてだったので、こんなことができるんだと感動しました。

最後に休憩をした後のコースは一番きつうつらかったけれど、そこを乗り越えてロープウェーの乗り場に着いたときは本当に達成感でいっぱいでした。

夕食後、(ユースホステルのペアレントである) K夫さんのお話を伺って、経験することが大切なのだということを学びました。これから保育者として働いていくうえでどうあるべきなのかということも教えてもらった気がします。今の子どもたちや私たちに足りない部分を補えるよう、まずは私がたくさん経験して幅のある人間になりたいと思います。

明日はいよいよスノボなので楽しみです。

スノーシューハイキングでは、「最初はうまく歩けなかったけど」と、雪の中を移動することの大変さを実感したが、「次第に慣れてきて」、斜面を駆け下りたり、滑り下りたりする爽快感も味わった。「休憩後のコースは一番きつうつらかった」けど「本当に達成感でいっぱい」と語っていること、A子に関してはこの日の夕方の活性度が全期間を通して最も低い値を示したことからも、この日の活動の身体的負荷はかなり高く、それをやり遂げた達成感とは並ならぬものだったことが伝わってくる。

夕方はおそらく疲労困憊であったものと思われるが、ゆったりとくつろいだ後、体験の内容が整理されていたのであろう。ユースホステルの特長でもあるが、ペアレントが夜の語らいの場に加わってくれる。ペアレントのK夫さんは、雪国の暮らしの話を伝えてくれたのであるが、その中で子どもたちとかまくらを作った話から「子どもにとっての体験とは」というような話題で参加者と楽しく語り合った。「子どもにとっての体験」という共通の話題でKさんの話を聞き、また自分の思いも語ることで、「まずは私がたくさん経験して幅のある人間になりたい」と、本人にとっての「体験(経験)」の意味づけ、価値づけが促進されたものと思われる。

3日目には、スノーボードのことが語られている。この日は天候が悪かったが、スノーボードを習得することは学生自身が最も関心を寄せ期待していたことであり、A子を含め誰もが意欲的に取り組んでいた。

今日は、楽しみにしていたスノボに初挑戦しました。

最初、インストラクターの方に教えて頂いているときは、とても難しく感じて本当に滑れるようになるのか少しドキドキしていました。

お昼にB子がケガをしたことを知ったり、天候が悪くなって午後スノボができなくなるかもしれないかと、とても不安でした。しかし、お昼を食べ終わったくらいから、天候も回復して、また滑れると思ったときはとても嬉しかったです。B子も全然大きなケガではなくてホッとしました。

スノボでは体全体を使って慣れていったので、本当に体当たりで、自分でコツがどこにあるかなどを試していったので、体がとても痛くなったけれどそのぶん滑れたときには本当にうれしいでしたのしかったです。

夜の反省会では、3日間を振り返って本当に貴重な経験ができたし、仲間がいて、このメンバーでこれだからこんなに楽しい宿になったということを改めて実感しました。

そしてこの体験が私の保育の幅を広げることにもつながるとてもいい勉強になりました。

11名の学生に対して現地スキー学校のインストラクター2名が指導に当たり、スノーボードの講習が進められた。午前中の講習でスノーボードの着脱、転倒の仕方、止まり方など基本的なことを順調に習得することができた。しかし、天候はますます悪化し、それに加えて、転倒したB子にC子が追突するという事故（後述）が起きた。そのため、不安感と疲労感から昼食休憩時のグループの雰囲気は停滞していた。筆者は午後の過ごし方について、休息も含めて本人たちに選択するよう促した。その結果、B子とC子は休息（B子が受診を希望したため、二人で病院に行くことになった）、他のメンバーはスノーボードを継続することになった。次第に天候も回復し、A子たちは満足するまでスノーボードに取り組むことができた。「体当たりで」、「体全体で慣れていった」、「自分でコツがどこにあるか試していった」と語られているように、自ら習得したという実感を得られる体験だったようだ。

そして、最後に3日間全体を振り返り、「私の保育の幅を広げることにもつながるともいい勉強」と、前日の日誌でも使っていた「幅」という言葉を使って体験をまとめているのが印象に残った。

## 2.2. B子のエピソード

B子の活性度と安定度のプロフィールは、事前と初日夜の活性度が他と比べて相対的に高いのが第一の特徴であった。初日に「わくわくドキドキでした」と語っていることにも、そのことが反映されている。しかし、「初めてのことばかりで上手にできないことがたくさんあり、心に余裕がなくなる」と語っているように、実際にやってみるとそれまでの気分がしばらくでしまうようだった。ほぼ全員が「初めてのことばかり」だったはずであり、筆者から見ても上手にできる・できないという格差が目止まることはなかったのであるが、B子本人にとっては「できないこと」ばかりに感じられたのだろう。

今日は初めての長野県に来て、周りの環境も、景色も全く違ってわくわくドキドキでした。

けれど初めてのことばかりで上手にできないことがたくさんあり、心に余裕がなくなることも場合によってはありました。けれどそんな時、友達だったり先生が助けてくれたので、やっぱりどんな時も一人じゃないんだと改めて感じました。

今日の出来事で最も印象深く残っている、かまくら作り！

みんなでどうしたら上手にできるかなと考えながらつくっていき、8人も入れる大きなかまくらができました。雪に体全体でぶつかりながら友達とコミュニケーションをとったり、笑ったりすることが本当に楽しかったです。かまくら作りをする上で、知らない性格だったり、良さをすることもでき、また自分自身まだまだ人に頼ってしまうところがあるなと感じました。

また、お風呂や食事の場面でも、みんなと寄り添って過ごすことが本当に幸せだなと思いました。ご飯もりもり食べて、明日も一日思いっきり楽しみたいと思います。

B子の活性度と安定度のプロフィールの第二の特徴は、夜（就寝前）の活性度が相対的に高いことである。まだ体験され得ぬ明日の活動に向けての期待感の高さの表れであり、それはB子自身がそれを乗り越えることに対する期待感とも思われるが、不安の裏返し of 過剰な高ぶりであったのかも知れない。一方で、朝の活性度は相対的に低く、2日目には「今日も1日頑張るぞと気合を入れて」活動を開始している。

朝からたくさんのご飯を食べ、今日も1日頑張るぞと気合を入れてスタートした2日目。

今日はリフトとゴンドラに乗って頂上付近まで行きました。ゴンドラもロープウェーも初めてで、高



い山の景色がすごくきれいでした。やっぱり、雪山っていう景色を今までにテレビなどでしか見たことがなかったので、直接見ると感動しました。

また、ハイキングでは思った以上にキツく、歩くことも大変で自分に負けそうになる場面がたくさんありました。けれど、今日の目標だった「積極的に」ということを達成したかったので、(ガイドの) Sさんの後ろを必死で追いかけてました。途中、本当に厳しいことばかりで、「もう嫌」と何度も思いましたが、やはり周りの友達ががんばっているんで負けじとがんばりました。

お昼、みんなで雪のテーブルでお昼ご飯を食べたときは、本当においしくて幸せでした。今日体験したことは、もう二度とないかもしれないけれど、(ペアレントの) K夫さんがお話してくれたように自ら体験し、感じることの素晴らしさを味わえたので大切にしたいです。

また、ナイトハイキングでは、作ったかまくらにロウソクの火をつけ、みんなで星をみてきました。K夫さんのお話が今日の出来事の締めくくりとして心に響いたように感じます。

今現在の流れ、子どもの状況に合わせた保育作りができるようさらなる経験を積み重ねたいです。

B子にとってスノーシューハイキングは「思った以上にキツく」感じられ、「本当に厳しいことばかり」で「もう嫌」と思いながらも頑張り通したことが語られている。ここでは「やり遂げた」ことに焦点が当てられ、前日のように「上手くできない」ことにはとらわれていないようにも感じられる。

また、食事に関する記述が多いことは、B子の体験内容の記述の特徴である。朝から「たくさんのご飯を食べ」、昼には雪のテーブルで「本当においしくて幸せ」と感じている。他にも、「みんなと寄り添って過ごすことが幸せ」、「(雪山の景色を) 直接見ると感動」、等のように、自分自身が内的に感じ取ったことで満たされた思いが多く綴られている。他の参加者が運動感覚的なものを多く記述していることと対照的である。

3日目、B子はスノーボードで転倒しゲレンデに座しているときに、同じく転倒して滑り込んできたC子に追突されて腰を打ち、かなりの苦痛を味わった。痛みでしばらく動けずパトロールに搬送してもらう事態となり、重傷なのではないかという不安にも耐えた。B子の3日目のエピソードは、その体験から感じたことが中心に綴られている。

今日は、昨日に比べて朝から大雪で、大丈夫かな?と思ったけれど、スノボができて良かったと思います。

今日はスノボの練習中に少しケガをしてしまって1日そのことが思い出として心に残っています。あの時は本当に痛くてつらかったけれど今思えばケガをしたからこそ知ることができたことがたくさんあると感じます。

まず、人の温かさ。私のケガ一つのためにたくさんの人がいろんなところで動いてくれました。それはきっと「当たり前」とされている中でも、本当に幸せなことだと思います。この世の中では、初めて会った人にこんなにも優しくしてくれる人がたくさんいるんだと改めて感じました。

また、いろんなことでみんなにも支障が出てしまったにもかかわらず、「スノボがやりたい」というみんなのありのままの姿が私は嬉しかったです。

今日は、C子がずっとそばにいてくれました。(ぶつかったC子に気を遣わせてしまったことに対して) 本当に責任を感じていたのですが、タクシーの中で(C子に)「大丈夫だよ。もし逆の立場でも大丈夫だよって言うでしょ。ケガをするのもさせちゃったのも私たちでよかったね。」と話しました。それが今日とても幸せでした。

タクシーで運転手さんがとても親切にしてくれたのですが、やはり人は初めて会った人にも心をひらき相手の個性を受け入れれば、すごくステキな人とたくさん触れ合っていけるものだと感じます。私は今日だけでたくさんの人と出会いました。ひとりひとりの出会いと、今っていう時間を大切にしたいです。いろいろとありがとうございました。

B子は、C子との関係（自分の痛みに寄り添ってくれた）、他の仲間との関係（B子のケガの状況を気遣いつつも、B子の皆に迷惑をかけたくないという思いも尊重し「午後スノーボードをする」という決断をした）、B子の緊急事態に即時対応してくれた人との関係などから、他者と心を「触れ合って」いく可能性について、考えを深めている。

B子のエピソードを総合的にみると、3日間の活動の心理的・身体的負荷がB子にとっては限界に近く感じられたが、仲間との関係に支えられての達成であったことに意味を見出しているものと理解できる。具体的には、スノーシューハイキングのように自分にとって困難なことをやり遂げたり、思いがけぬ事故という苦痛に満ちた状況を脱することができたりしたのは、仲間がいたからであるという考え方に貫かれている。初日の活動の中でB子は、「どんなときも一人じゃないんだと改めて感じた」、「知らない性格だったり、良さを知ることでもでき、また自分自身まだまだ人に頼ってしまうところがある」と綴っているが、それが全体を通しての気づきと呼応しているようで印象に残った。

### 3. 総合考察

#### 3.1. 活動一身体で感じとることから

雪遊びでのかまくら作り、スノーシューハイキング、スノーボードに共通するのは、自然の中に直接身を置き、五感や運動感覚を通して身体で感じ取ることから多くの気づきを得られる活動であったということである。

初日に設定した雪遊びの時間には、遊びを通して雪の特性を知ってほしいという筆者の意図はあったが、基本的には参加者の自由な活動であり、最終的にはかまくら作りという展開になった。かまくら作りは、雪を掘る、集める、運ぶ、山にする、踏んで固める、中を掘る、など、目標を共有することが誰にとっても容易であり、全員同時にかかわれる遊びであった。また、「人が中に入れるように作りたい」というわかりやすい達成基準が共有され、「実際に自分が入ってみる」というやり方で各々がそれを確認していた。参加者の日誌には、一人一人がさまざまなやりかたで雪遊びに取り組み楽しんでいることの良さを認める記述があった。そのような認知的な相互理解と同時に、雪掘り雪積みを通して身体感覚を完全に共有するような共通理解のあり方が参加者間に存在し、その身体性の共有が充実感や達成感を高めたようにも感じられる。

一方で、スノーシューハイキングは自然との関係の中で自己に注目する活動だったといえる。仲間と行動を共にするという点ではかまくら作りと同じである。活動自体はとてもシンプルなものであり、未知の自然環境の中に「一緒に行って一緒に帰ってくる」ということのみであった。しかし、A子もB子も「きつい」と表現しているように、身体的な負荷の高い活動であった。仲間と共に行動するということは、きついけれども共に行かなければならないという厳しさがある。先述のように、かまくら作りの達成感の基盤には身体性の共有があったと思われるが、スノーシューハイキングの場合は同じルートを共に歩み、「きつい」と表現される点は同じであっても、その過程はかなり個人的な体験である。仲間と同じ体験をし

ているのだが、自らを引き受けるという点において強く意識されるのは、おそらく自己そのものである。したがって、スノーシューハイキングの達成感の基盤は、「一緒に行って帰ってくる」ということを達成できた自己の身体に対する肯定感にあるものと思われる。

また、スノーボードは、身体の内的な感覚を基礎に技術を習得していく活動だったといえる。ゲレンデという管理された環境とはいうものの、自然の雪面は常に変化するものであり、それに合わせていく身体の使い方を追求することになる。かまくら作りやスノーシューハイキングでは、技術を身に付けること、つまり「何かができるようになること」という側面はほとんどなかったが、スノーボードではそれが中心であった。基本的なことを教わった後は、試行錯誤を繰り返すことで、「滑り出すー止まる」、「滑り出すーターンするー止まる」という動きのまとまりを徐々に遂行できるようになっていく。多くの参加者が全くの初心者であり、「できなかったことができるようになる」という充実感を得られる活動であったものと思われる。

以上、身体で感じ取ること注目して参加者の学びのみちすじを考察すると、幼児教育の場で子どもたちに日々経験させたいこととの共通点が見えてくるようにも思う。このことを参加者が意識していたかどうかははっきりしないが、今日の充実が明日への期待につながるように、現在の自己の充実が将来への思いを賦活するものであったのかも知れない。

### 3.2. 生活—快く気分よく過ごすことから

宿泊を伴う野外教育プログラムでは、「生活」そのものが大切である。各人の日常生活の場とは異なる環境の中で快く気分よく過ごすということは、誰にとっても容易かといえばそうでもない。しかし、野外教育プログラムでは、自然の中で普段と違う活動をするということが、食べる、休む、憩うといった、生活の中にあるものの意味を際立たせる。「集団生活」という捉えとは多少異なる、「他者との生活を心地よくする」ということへの意識づけが容易にできる環境であるともいえる。

二次元気分尺度で把握した気分の変化から、生活の中の「快」について考察していきたい。ユースホステルは暖かく快適であることに加え、ペアレントのK子さんのご近所の婦人が作ってくださる手作りの温かい食事は、まるで家庭での食事であるかのような感覚だった。B子の日誌には、仲間と共にとる食事に関することが何度も語られていたが、その安らいだ気分の表れであったかもしれない。また、今回の自主ゼミに参加した11名は「同じクラスだが、学校生活の中で常に行動を共にしているメンバーではない」とU子は話していた。その点では、野外での活動を通して深まった相互理解が生活場面でも保たれ、心地よく過ごせる人間関係が安心感を醸成し、揺らぎにくい安定度につながったのかもしれない。

### 3.3. 「今」と未来との間で

以上、野外活動プログラムの中の「活動—身体で感じ取ること」と、「生活—快く気分よく過ごすこと」のそれぞれに目を向けて考察を試みた。今回参加者が経験したことの中には、「環境との相互作用の中で身体感覚を伴う多様な活動を経験することにより自己が充実し、安心感のある人間関係の中で各々の自己が十分に発揮される」機会が豊かに含まれていたといえる。日誌の記述と気分の変化の双方を重ね合わせて理解すると、この4日間の中で「一日の活動を満足のうちに終えて夜は休み、朝は活き活きとして新たな活動に向かう」ということを繰り返し経験することができたといえる。

体験が今日から明日につながっていくということの基盤には、生を受けてから生を全うす

るまでの自己と人生を共にする身体があるのだが、通常そのようなことは意識せずに毎日を経営している。今回のような体験をしても、それらは直接意識されない。身体活動の中で得られる充実感として認識されるものを通して、それについて考えることができるのみである。しかし、それを考えることが、体験が今日から明日につながっていくことを理解するうえで不可欠である。

それゆえ、ここで検討してきたような充実感を得られる体験は、子どもの育ちを支える保育者になろうとする者にとって重要であり、そのような体験が得られる機会を保障する必要がある。

## おわりに

本研究の目的は、授業等の実践研究を通して保育者をめざす学生の学び方の特徴を理解し、保育者養成短大において「自ら学ぶ」保育者を育てるために必要な体験内容を捉えることであった。

雪上での自然体験プログラムでの体験内容は、環境との相互作用の中で身体感覚を伴う多様な活動が豊かに含まれていたことが、日誌の記述の分析を通して明らかとなった。そして、複数の学生が体験のふりかえりを保育に対する思いと関連づけて記述した。今回のプログラムでは、指導者側からそのように考えるように方向付けることは行っていない。学生にそのような考えが自然に生じたと言える。一概にはいえないが、自らが体験したことをふりかえりながらも未来の自分に投射して現在に意味を紡ぐというのが、保育職志望学生の学び方の特徴のひとつと言えるかもしれない。もしそうであるとしたら、保育職志望学生が「多様な体験」をしておくことの意味は、「将来保育者になったときに多様な体験を子どもに提供するときには役立つから」という技術取得的な理由ではなく、現在の自分に必要なことを自らの将来から自分の手許に引き寄せ、それを手がかりに今必要な体験を求めていくこと、つまり、将来のためではなく、今自分自身が学ぶための視点取得的な理由が先にあるものと考えられる。

また、生活展開時間における快い気分は、雪上での自然体験プログラムや安心できる仲間関係の中での自己の充実の表れと理解したい。また、自然はいわゆる山川草木、空や風といった自然物も当然含むが、小さな子どもにとっての自然は身体と直接触れ合う環境全てであろう。雪上での活動は多くの学生にとって未知の世界であり、そこでの体験は子どもが新たな環境に出会う時と同じような感覚を伴うものだったのかもしれない。未知の世界への探索・探究の欲求が十分に満たされたところの「快」であったものと想像できる。特別な活動に限らず、日常生活の中でも自然にかかわる活動—身体を通して外部環境や内なる自然と混然一体となるような活動—が充実していれば快い気分で日々を過ごせるものと思われるが、筆者の主観の域を出ない。今後、自然が身体に与える感覚とそれを感じ取る身体との関係について、実践を通して考察を深め、論究していきたい。

## 文 献

遠藤知里（2013）あそびを学ぶ・あそびで学ぶ：「石の水切り」への取り組みから、常葉大学短期大学部紀要（44），115-123.

文部科学省（2002）幼稚園教員の資質向上について－自ら学ぶ幼稚園教員のために（報告）.  
無藤隆（2002）はじめに，幼稚園教員の資質向上について－自ら学ぶ幼稚園教員のために（報告）.

坂入洋右，征矢英昭，木塚朝博（2009a）TDMS-ST 二次元気分尺度．販売元アイエムエフ株式会社.

坂入洋右，征矢英昭，木塚朝博（2009b）TDMS 二次元気分尺度手引き.

山田りよ子（2009）領域「環境」と保育方法．柴崎正行，若月芳浩編，最新保育講座9 保育内容「環境」．ミネルヴァ書房.

#### <付記>

本研究は、科学研究費補助金若手研究（B）「適応の観点からみた野外教育プログラムにおける「自然」の意味」（課題番号 20700480 研究代表・遠藤知里）の一部として実施しました。また、本研究の一部は、日本野外教育学会第 17 回大会（2014 年 6 月・東京海洋大学）で発表したものです。